

「^{じんしょうけい}任少卿に報ずるの書」を認^{した}めた司馬遷の動機について【サマリー】

木村実季

「任少卿に報ずるの書」は、作家・中島敦がその畢生の名作『李陵』執筆にあたって材を求めた原典のひとつである。『李陵』には、李陵・司馬遷・蘇武の三人が登場するが、それぞれがいかに自身の境遇・運命に処したかを描いて見事である。それは無論のこと中島敦の文学的才能のなせる技ではあるが、「任少卿に報ずるの書」自体が、天才作家に着想を与えるほどに、司馬遷の心情を赤裸々に述べて文学的であったからでもある。「任少卿に報ずるの書」に込められた司馬遷の心情を、その制作動機という視点から考察し、司馬遷の人間観・歴史観に言及したい。